三国木彫を支えた人々

島雪齋図録

三国木彫を支えた人々

島雪齋図録

松平春嶽手沢
伽羅木白衣観音線香立　島雪齋作
春嶽公記念文庫蔵

昭和52年４月

福井市立郷土歴史博物館編

三国木彫の伝統と

島　雪　齋

港町三国は、古くから各地の文物が移入され、それが庶民の教養の培(つちかい)となって、近世ことに文化文政の頃（一八〇四～一八三〇）になると、歌川(かせん)の様に遊女でさえ高い教養を身につけた者があらわれる程に、町民の間に文芸の興隆をみるに至った。

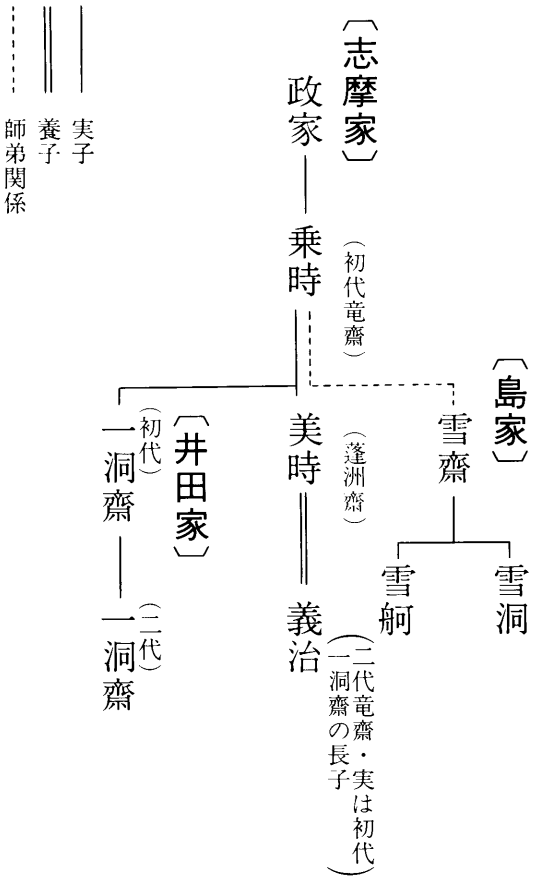
この様な三国には、古くから木彫の技法も伝えられていたが、やがて志摩乗時（初代竜齋。寛政二年一七九〇～嘉永三年一八五〇）が出て、従来の三国木彫の技法に、漆芸の手法を加え、工芸的な美しさを表出する装飾性のつよい彫刻をつくり出し、装飾彫刻の分野で一つの新技法を生み出した。彼の刀法は、蓮華鑿(れんげのみ)様の鑿に、丸鑿・平鑿を巧みに交用するものであったが、これは寛文年間の建造と伝える滝谷寺の観音堂向拝の植物文様の彫出に見られる刀法と似ており、古くから伝えられてきた三国木彫の伝統を汲むものであった。

その弟子、島雪齋（文政三年一八二〇～明治十二年一八七九）は、乗時の技法を踏襲して、欄間・木鼻・蟇股(かえるまた)等の建築の装飾物を彫る傍ら、小間鋤・切刃の小刀等を用いて、根付類の如き巧緻繊細を極める小物類をも彫出し、当時の町民の文芸興隆の気運にのって、木彫を庶民の生活の中にも、深く浸透させていった。彼のモチーフ（彫刻を行うに際し、これを彫刻してみたいと、強く心を動かされたもの）は、羅漢・竜虎・獅子・松・鳳凰・孔雀・牡丹・雞・菊・唐子・童子・雲等、主として当時庶民の間にも馴染まれていた狩野派の絵師が好んで画材としたものと同様で、特に彼特有の題材と言える様なものは見当らない。

普通、彫刻に於て、装飾性のつよいものや、伝承の技法を忠実に踏襲しているものには、表出が形式的なものが多く、そのため彫刻としては内容感に乏しく清彩を欠くものが多いが、雪齋の遺したものには、それが比較的少い。それは彼の作品には、たとえ工芸的な表出がなされていても、その彫出の基調に写実性がみられるためで、彫刻の本質として欠くことの出来ない立体的な物の捉え方が、かなり出来ていたための様である。三国神社の神馬のモデリングは、最もよくそれを示している。

雪齋の技法はその子雪洞・雪舸に受けつがれ、志摩竜齋乗時の後は次子蓬洲齋美時がついだ。また乗時の長子は、新たに井田一洞齋を名乗る漆芸を中心とする一派を立てたが、竜齋・雪齋以後は何れも手法的には、師の流れを汲む以外に新たなものは見られず、山田鬼齋が出て、デッサン力の修業を基礎とした近代彫刻を取り入れるまで、三国木彫の新たな進展はみられなかった。

三国木彫の系譜


〔島家〕
雪洞
雪齋
雪舸
（二代竜齋・実は初代一洞齋の長子）
〔志摩家〕
政家
乗時
（初代竜齋）
美時
（蓬洲齋）
義治
〔井田家〕
一洞齋
（初代）
一洞齋
（二代）
実子
養子
師弟関係

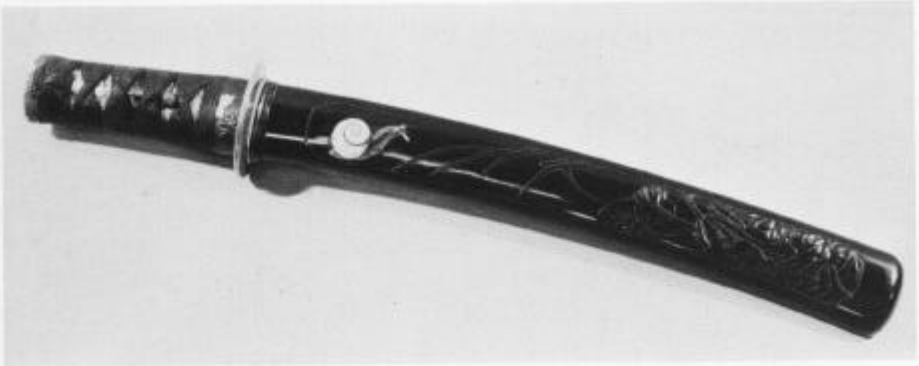
島雪齋

松平春嶽手沢　百老竹置物　　春嶽公記念文庫蔵

欄　間（慶法寺本堂内陣）　　三国町 慶法寺蔵

大　衡　立　　三国町　三国神社蔵

ざくろ円盆　　三国町 森田六郎氏蔵



短刀拵「三すくみ」　福井市 大久保由松氏蔵

乾坤二大字香合
三国町 森田六郎氏蔵

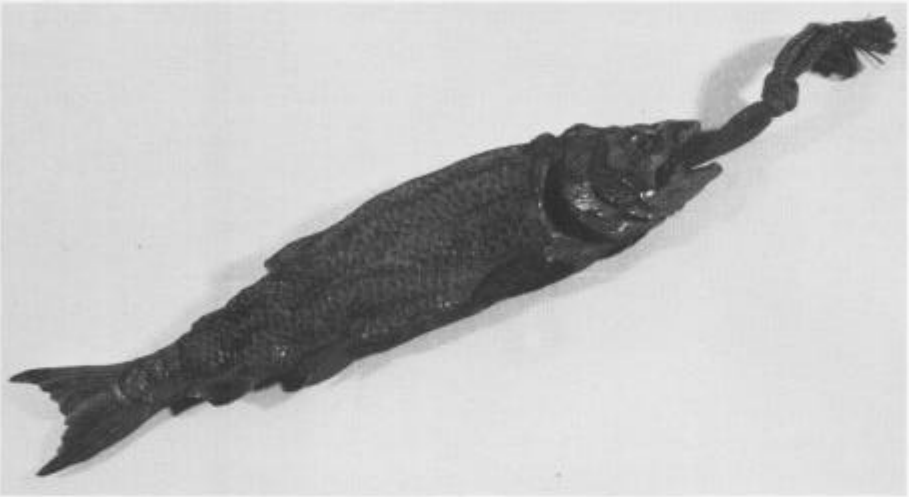
三国幽眠所持　観音像
銘「為三国君謹銘　雪齋」
三国町　専久寺蔵

布袋像　三国町　藤田久三郎氏蔵

人物根付
子持虎根付
鯖江市 納村力弥氏蔵

三聖像（達磨・観音・釋迦）　鯖江市 納村力弥氏蔵

島雪洞



新巻鮭瓢下げ　　三国町 森田六郎氏蔵

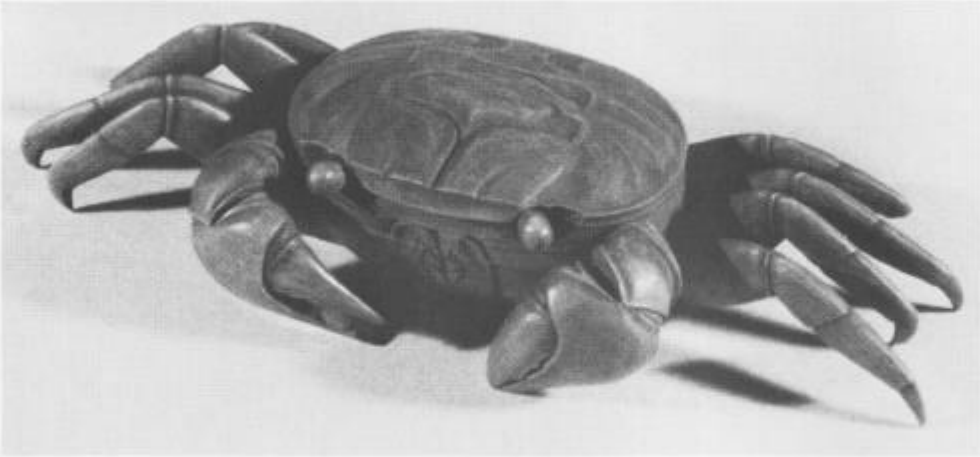
島雪舸

竹製矢立　　三国町 内島洪淳氏蔵

志摩乗時（初代竜齋）

欄間（専久寺本堂内陣）　三国町 専久寺蔵

志摩美時（蓬洲齋）

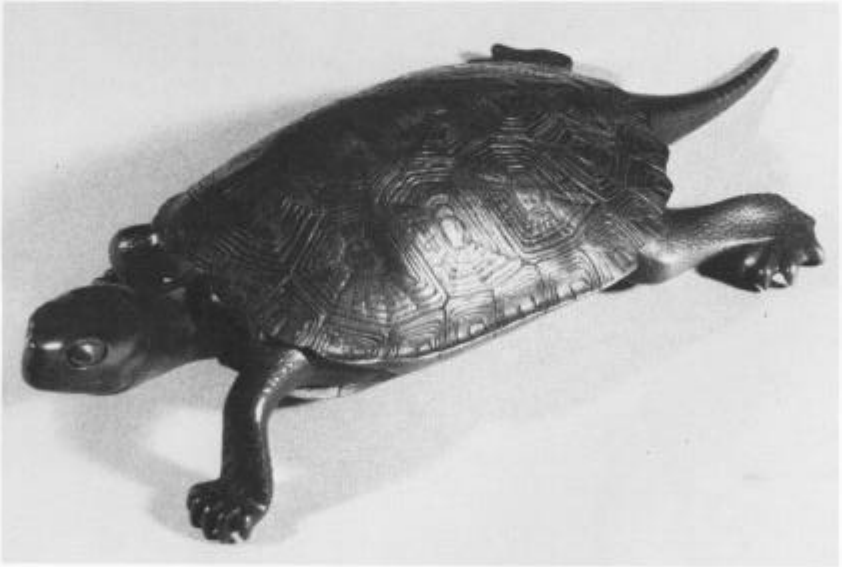


かに香合　三国町　小坂秀成氏蔵

竜（永正寺内陣須弥壇装飾）　三国町　永正寺蔵

志摩義治（二代竜斎）

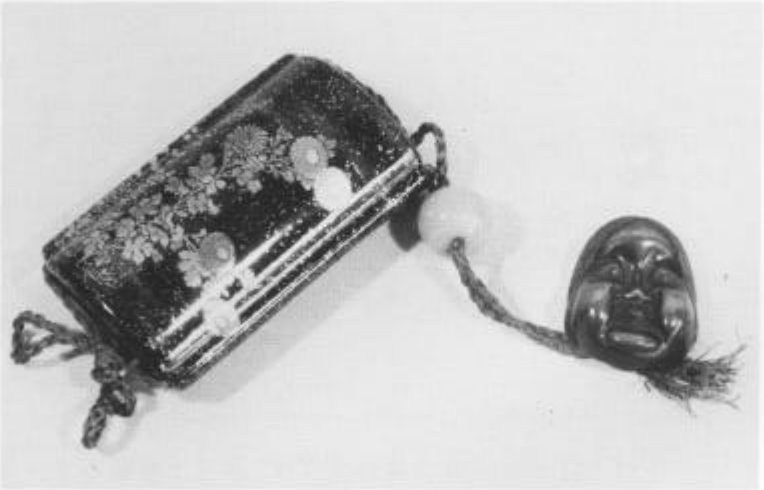
衝立　三国町 梅谷与三郎氏蔵



亀　紙押え　　三国町 小坂秀成氏蔵

井田一洞齋

短刀拵　初代一洞齋秋虫蒔絵・雪齋彫製　　三国町 井田秀太郎氏蔵



菊花蒔絵印籠　　三国町 井田秀太郎氏蔵

三国木彫を支えた人々

島雪齋図録

昭和52年5月1日発行

撮影・発行　福井市立郷土歴史博物館
福井市足羽1丁目8－16

印刷所　創文堂印刷株式会社
福井市日之出3丁目3－29

福井市立郷土歴史博物館編
昭和52年５月発行